

〔倭訓栞前編十四〕たいし 倭名抄に、舵をよめり、古事記に、當藝斯形と見えたる是也といへり、船尾に在りて、船を正す木の柄の曲れる物を指り、日本紀には、かちとよめり、抄に、今案、舟人呼、挾抄爲、舵師是と見え、漢語抄に、舵、船尾也ともみゆ、

〔和漢船用具十一〕舵の小名の小名の。身木又耳木と云、三頭繩穴 上大目指穴 下大目指穴 落込おち

つまりと云、おと羽板明律考、舵門、かちわきいと訓す、八雲御抄、かちのはと見へたり、家隆卿とし込床に合處、と羽板渡る舟のかちのはとよめり、舵を梶によせてよめるなれば、葉板なり、すこしは、この心なるべし、と上棧中棧 下棧又のぼり棧と云あり、明律考、潮切 水越孔又ゆりこ

越木に有、大水越羽板にあり、左右に南輪精羽板にある穴、又

川舟舵の小名端身木上頭棧大目中架略羽板

轆轆舵本邦にては、北國船はかせと云舟に用、略中

舵柄又舵棒と云、取木とも云、舵の取木なり、

〔古事記中景行〕到當藝野上之時、詔者、吾倭心恒念、自虚翔行、然今吾足不得步、成當藝斯形、自當下三故號其地謂當藝也、

〔古事記傳二十八〕當藝タギ斯シは、和名抄舟具に、唐韻云、舩字亦正船木也略中とあり、延佳、此を引て、疑

此物也と云る、信に然り、玉篇に、舵正船木也、設於船尾、與舵同と云、釋名、師真淵云、舩は、今世に

加遲カヂと云物なり、万葉などに加遲とあるは、今世に舩と云物にして、舩には非ず、然るに、歌又祝

詞などには、加遲カヂ又加伊カヒをのみ云て、多藝斯を云ること無し、そは歌によみなれず、句の調も叶

はねば、おのづから漏たるならむ、祝詞も、調を擇べばなりと云れき、さて多藝斯を、多伊斯と云

は、中古より音便に頼れたるなり、倭の地名の當藝タギ麻マをも、後には多伊麻と云が如し、其外も、伎

伊イと云格格多藝志耳命など云名も、此物に因れるにや、名義は、万葉七五丁に、大舟乎荒海爾オホフネヲアラウミニ榜出コシイダ

八船多氣ヤフネタケとあるは、船を彌多氣イタタケと云事にて、力を致し、左右に擬マカサひて、船をやるを云るなれば、船